

『コメを選んだ日本の歴史』

原田信男著（文春新書）

米は「主食」として日本人の生命を支えてきた特別の作物である。かつて米は租税の中心であり、現在でも、祭り、宗教（神道）、地名、人名等において稲作、米は日本人の生活、文化と密接に関係している。本書は、日本の通史を、この特別な存在である米、稲作を中心にまとめたものである。既往の研究成果を踏まえたものであり、特に目新しい主張はないようであるが、「力うどん」「しゃり」など米に関する言葉の由来や、魚肉ソーセージが日本に肉食を普及させる露払い的役割を果たしたことなど、随所に著者の博識が吐露されており、興味深い内容となっている。

『日本書紀』に「農は天下の大きな本なり。民の恃みて生くる所なり。」と書かれているそうであるが、農業（特に水田稲作）を中心として日本の歴史を考えることは、多くの歴史家の通念となってきた。しかし、日本農業において畑作が果たしてきた役割も大きく、また水田農業が日本に伝わる以前からあった縄文的な狩猟・採集・漁労文化の影響も無視できない。網野善彦氏は、それまでの農業・農民中心史観を批判し、日本の歴史において非農業民の果たした役割を主張したが、その問題提起自体は重要な意義があったものの、日本の歴史における米、稲作の重要性は否定できるものではない、というのが本書の主張である。

本書は、農業史という狭い領域にとどまらず、政治、社会、文化、食生活など幅広い分野における研究成果を踏まえて書かれている。特に、日本国家の成立に果たした米の役割について、「天界からイネを伝えたアマテラスが、水田農耕を見守る太陽神とされ、その系譜を引く天皇が稲作に関する最高の司祭者と

なった」と指摘しており、垂仁天皇の時代にアマテラスを政治の場である大和から引き離して伊勢神宮に祭ったことを紹介している。「豊葦原の瑞穂国」はこうして形成され、米はその後の政治・経済において大きな役割を果たしていく。

かつて柳田国男は、この日本にとって最も重要な作物である稲がどこからどのように到来したのかを探求し、南方からの伝来を主張したが、本書では、稲作の起源に関するこれまでのインド説、雲南・アッサム説や、近年注目を浴びている長江下流域説を紹介し、日本には、熱帯ジャポニカが南方から伝わり（縄文稲作）、その後、縄文末期から弥生期にかけて水田技術を伴った稲作が朝鮮半島経由で入ってきたとする二段階説をとっている。縄文末期から弥生期にかけて朝鮮・中国から渡来人が多くあり、その後も百済等からの渡来人が日本の国家形成、技術普及に大きな役割を果たしたことが明らかになっているが、中国・朝鮮と日本の関係についてはまだ解明されていない問題が多いようである。特に、稲作の伝来と日本語の起源との関係は非常に重要な問題であると考えられるが、残念ながら本書ではこの問題には触れていない。

このように国家形成と深い関係を持つ米、稲作であり、食料供給に占める米の重要性は今も変わっていないものの、日本人の米消費量は近年大きく減少しており、稲作農家戸数も減少し日本経済における米の重要性は低下しつつある。良いか悪いかはともかくも、こうした変化によって日本人の国家観は変質してきていると言えよう。

（2006年5月 税込み830円 262頁）

（清水徹朗）